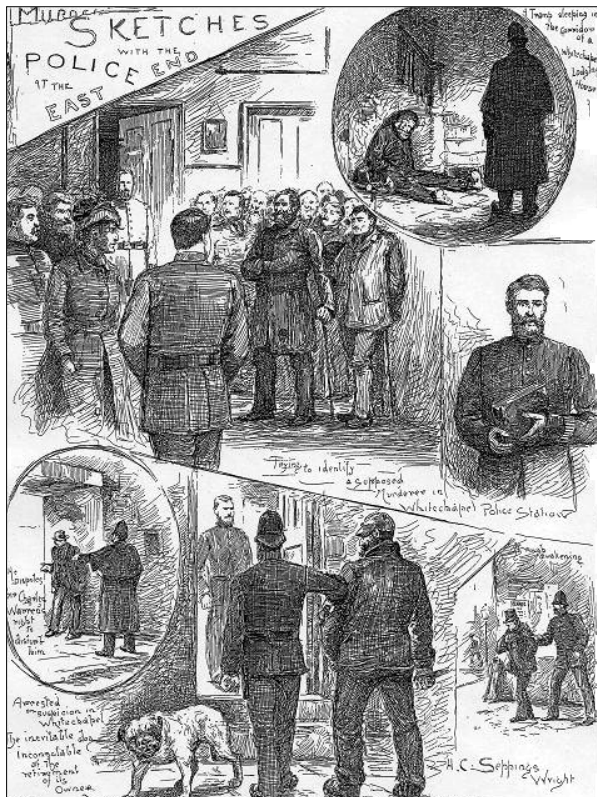


第七章

犯 罪

——越境する犯罪と暴力——

玉井 史絵



ホワイトチャペル殺人事件（切り裂きジャック事件）の捜査風景（『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』1888年9月22日号）

「我々の文明はこの時点まで、いつだって馬鹿げたぐらい欠陥だらけですよ。男たちは女性を発達の野蛮な段階にとどめておいて、彼女たちは野蛮だつて不平を言っている。同じように、社会は犯罪者階級を作り出すのに躍起になっておいて、犯罪者に対して怒り狂っている。けれどもご覧の通り、私はその男たちのひとりで、しかもあまり我慢強くないひとりなんです」

(第十章)

これは『余計者の女たち』(一八九三年)に登場する独身男性エヴァラード・バーフットが、女性のための職業訓練学校で働くローダ・ナンに対して語る言葉である。自立する女性ローダに抗いがたい魅力を感じたエヴァラードは、この言葉に続けて女性を文明化する教育は男性の利益にもなるのだと説き、ローダたちの行っている事業に理解を示して彼女の心を引こうとする。女性の問題は本書の第三部に譲るとして、この引用文で注目すべきは、女性とともに犯罪者が文明の枠外にあるものとして並列されている点だ。エヴァラード自身は男性のひとりであり、男性は女性、犯罪者との対極にあつて文明を体現するものとして位置づけられている。だが同時に、「犯罪者階級」という範疇は、社会が(より厳密には男性社会が)「作り出す」ものだということをも、彼の言葉は示している。近代社会の権力は比較、区別、序列、同質化、排除によって(逸脱)を規定し(規格化)するとフーコーは論じる¹⁾。犯罪者という逸脱を創り

出すことで、中流階級男性を規範とする権力は成立したのである。

ギッシングの生きた後期ヴィクトリア朝は、(犯罪学)、(犯罪人類学)といった学問によって、犯罪者が科学的分析の対象として研究され、議論された時代であつた。また「切り裂きジャック」のような世間を震撼させる事件が起き、ジャーナリズムが競ってセンセーショナルに犯罪を報道した時代でもあつた。ギッシングの同時代人にはシャーロック・ホームズ・シリーズの作者 Doyle や、『ジキル博士とハイド氏』(一八八六年)の作者ステイヴンソンがいる。犯罪は世紀末英国社会の病理をあらわすものとして、小説やジャーナリズムの世界で繰り返し表象されたのであつた。

ギッシングの小説においても数多くの犯罪や暴力が描かれている。それは世紀末社会の反映であると同時に、逸脱の表象を通して、正常の規範を確立しようとする試みでもあつた。しかし、逸脱と正常の境界線は曖昧で、逸脱は階級や国家といったボーダーを越境して、正常という規範を揺るがしていく。本章では、ギッシングの小説における犯罪と暴力の表象を、犯罪学をめぐる言説の文脈の中で分析することにより、時代の転換点にあつて揺らぐ規範について考察したい。

第一節 「生まれながらの犯罪者」

後期ヴィクトリア朝に流布した犯罪学における中心的人物は、イタリアの精神科医、監獄医として〈犯罪人類学イタリア学派〉を創始したチエーザレ・ロンブローゾである。一八七六年にイタリアで出版され、一八九一年にイギリスで翻訳が出された彼の名著『犯罪人論』は、大きな反響を巻き起こして当時の文化に強い影響を及ぼした。またロンブローゾは、『フォーラム』や『モニスト』といったアメリカの雑誌にも寄稿し、犯罪人類学の積極的な宣伝に努めた。『犯罪人論』の中で彼は、数多くの犯罪者の頭蓋骨を計測した結果として、大きいあご、高い頬骨、張り出した眉のアーチ、大きな眼窩などの特徴(図①)が、犯罪者、野蛮人、猿に共通して見られると述べ、犯罪人を「原始人や下等動物の獠猛な本能をその内に再現した先祖返りの人間²⁾」と定義づけた。またこうした「犯罪者のタイプ」は、身体的、知的、道徳的な遺伝性の欠損のため矯正不可能な「生まれながらの犯罪者」であるとした。ロンブローゾは内面の逸脱と外面の逸脱との間に密接な関係を認めている。「見ることができないものはすべて否定するのが私の鉄則である³⁾」と彼は『フォーラム』に寄稿した記事の中で語っている。犯罪者形質の目に見える印があるからこそ、それを見逃さないことによって、犯罪者を事前に避ける、犯罪者に特別な教育を施すと

いった対策も可能となるというのが、彼の主張であった⁴⁾。内面的逸脱は可視的なものであるとする彼の考え方は、長い伝統を持つ骨相学に大きな影響を受けたヴィクトリア朝の人々にも共通する考え方であったといえる。例えば、ロンドンの貧民の生活実態を調査したヘンリー・メイヒューは、路上生活者の特徴として「高い頬骨と突き出たあご」を挙げ、精神病院の医師アレキサンダー・モリスンは、「顔の特徴は精神の状態に密接に



図① ロンブローゾ『犯罪人論』(1876)の挿絵

関係し、左右される」として、目の動きや顔の表情に精神の異常を見出そうとした。⁵このような言説によって人々は、内面の逸脱を外面の逸脱に置き換え、犯罪者、下層階級といった人々の潜在的な脅威を、目に見える徴候としてとらえようとしたのであった。

ロンブローゾの主張は賛否両論を含め大きな反響を呼び起こしたが、論争の中心は、果たしてある特定の犯罪者形質というものがあるのか、そしてそれは遺伝するのか、「生まれながらの犯罪者」というのは本当に存在するのか、という問題であった（遺伝に関しては本書第六章参照）。『犯罪人論』の出版と前後して、当時萌芽期にあつた社会学や心理学といった幅広い分野で、この問題に対して様々な議論がなされたが、ある種の遺伝性を認める主張が主流であつた。精神科医のヘンリー・モーズリーは『精神病における責任』（一八七四年）という著書の中で、「犯罪者を研究しているものなら誰でも、明らかな犯罪者の部類の人間というものを知っている。彼らは大都市の泥棒の巣窟に群がり、飲酒にふけり、放蕩三昧で暴れまわり、婚姻関係や血縁の制約に関係なく、退化した犯罪者の人口を増殖していく」と述べている。一八七七年にアメリカで発表されたジュークス一家に関する有名な研究は、一家の子孫七〇九人中、売春婦、私生児、物乞い、前科者の占める割合が異常に高いことを示して、犯罪性の遺伝を統計的に証明しようとした。⁷実地の社会調査にもとづいて『ロンドンの人々の生活と労働』（一九〇二）〇

三年）をまとめたチャールズ・ブリスは、ロンドンの人々を年収、職業等に応じて八段階に分類し、「季節労働者、路上生活者、浮浪者、犯罪人、準犯罪人」から成る最下層クラスAの人々は、「かなりの程度遺伝的」であるとしている。彼はまた、これらの人々の生活は「野蛮人の生活」で、「個人としてはおそらくは矯正不可能」⁸だとの見解も示している。

もちろん遺伝的な犯罪者形質を認めた当時の主流の議論に対しては異論もあつた。特に貧困こそが犯罪者を生み出す原因であるとし、貧困を放置している為政者の側の責任を強調する改革主義的な議論は、十九世紀を通じて常に存在していた。『ウェストミンスター・レビュー』の一八九六年に掲載された「貧困と犯罪」という記事では、「貧困が増加すれば犯罪も増加する」⁹と述べられている。しかし、こうした記事においてさえ、犯罪者形質の遺伝性が完全に否定されたわけではなかつた。記事の筆者は「スラム街の社会的な雰囲気、生活の義務や責任に対する遺伝的な無関心に多大な影響を与えるので、最低の人間性以上のものは望むべくもない」¹⁰と続けている。『精神——心理学と哲学の季刊誌』に一八九二年に掲載された「犯罪についての考察」と題する記事においてW・D・モリスンは、「ロンブローゾが先祖返りに起因すると考えた犯罪者の異常性の多くは、犯罪の経歴が原因であるという仮説によつても説明できる」として、犯罪者の「異常性」が生まれつきのものだとするロンブローゾの説に対して反論を試みる。けれども、彼は最終

的には「退化し脆弱な体質を持つて生まれた人間は、職を得て生計を立てる可能性が低い。したがってそのような人は、より犯罪者になりやすいが、この場合彼を直接犯罪へと駆り立てるのは経済的な要因であつて、身体的欠損から来る生まれつきの異常性ではない」との、一種の折衷説に落ち着いている。彼の場合も犯罪者形質の遺伝性、先天性を完全に否定してはいないのだ。

十九世紀末に一世を風靡した犯罪人類学であるが、学問としての犯罪学はその後発展することなく、一九六〇年代になって復活するまで、長い空白の期間を迎えることになる。マリ・クリスティン・レブスは十九世紀末の犯罪学の隆盛と、一九六〇年代の再興の理由は、犯罪学をとりまく社会情勢にあると分析している。犯罪学の言説が流布する時期は、市民社会が不安定な時期と一致すると彼女は言う。十九世紀末は経済不況の中、労働者階級や女性の権利を求める運動が盛んになった時代であり、一九六〇年代から七〇年代は市民権運動や核兵器廃絶運動が起き、マイノリティ、平和団体、フェミニストや消費者団体までもが既成の権力に対抗した時代であった。犯罪学は国家がそれを必要とするときに現れる。「それはあたかも権力と知の關係に対する組織的な反抗がきっかけとなつて、犯罪者の言説と研究が増殖しているかのようだ——あたかも犯罪学の最初の機能は、逸脱の定義の拡大を可能とするような言説を生み出し、より厳しい管理の手續きにお墨付きを与えることであるかのよ

うだ¹²⁾」と彼女は論じる。例えばロンブローゾは、パリ・コミュニケーション支持者やアナキストには「犯罪者タイプ」が多く見られると述べている。彼は一方で「政治犯や最も暴力的なアナキストでさえ本当の犯罪者ではない」としながらも、他方で「彼らには犯罪者と狂人に共通する退化的な性質がそなわっている。彼らは異常であり、遺伝的にそうした形質を持っているのだ¹³⁾」と主張する。また先に引用した「犯罪についての考察」の筆者モリスンは、女性の自立と犯罪との関連について考察し、「女性が家庭や家族のつながりを持たず、孤立し、自立した生活を大都市で営んでいる場合、すぐに犯罪人口のより大きな割合を占めるようになるという事実は、一般的に広く認められている。よつて女性が男性と同じような社会的、経済的状况に置かれると、彼らの犯罪傾向もより顕著になると思われる¹⁴⁾」と論じている。十九世紀の犯罪学の言説は、市民権を求め始めた労働者階級の人々や女性と「犯罪者タイプ」とのあいだに共通点を認めることにより、彼らの運動の正当性を否定し、抑圧するのに加担したのであつた。

ギッシングの小説は、旧来の社会構造が大きく変動しつつある世紀末の不安定な社会を反映している。「暁の労働者たち¹⁵⁾」（一八八〇年）、「民衆」（一八八六年）、「ネザー・ワールド」（一八八九年）といった小説には、社会の不平等を怒り、労働者階級の地位向上や政治参加を訴える人々が、そして「余計者の女たち¹⁶⁾」には、男女の平等な社会参加を求めて活動する人々が登

場する。ギッシングがそうした世界の中に描く犯罪や暴力は、当時の犯罪学をめぐる言説と時には共鳴し、また時には不協和音を奏でているのだ。

第二節 貧困と犯罪

貧困者層の生活を扱ったギッシングの初期の小説には、犯罪や暴力の実態が詳細に描かれている。『チャールズ・ディケンズ論』（一八九八年）の中で、ディケンズの最後の小説『エドウィン・ドルードの謎』（一八七〇年）が殺人という「血なまぐさい俗悪な行為にまつわるつまらないミステリー」（第三章）をテーマとしたことを批判したギッシングは、決して犯罪や暴力をセンセーショナルに扱うことはなかった。しかし、犯罪は貧困者層の悲惨な生活実態を如実に表すものとして、作品に織り込まれている。『ネザー・ワールド』を例にとってみよう。物語はペコヴァ家の娘クレムによる、小間使いの少女ジェイン・スノードンの虐待から始まる。貧しい労働者ジョン・ヒューイットの二番目の妻マーガレットはお針子をしていた頃、貧しさに耐えかねて上着を六着盗み、六週間監獄に入れられたという過去を持っている。ジョンの息子ボブとペニロウフ・キャンデイの結婚式の日には、スラム街の若者たちとの乱闘のうちに終る。そのペニロウフの母はアルコール中毒で、断酒を幾度試みても失敗し、酒浸りの生活から抜けることができない。ヒュー

イットが貧しい生活の中、家族のお葬式だけはきちんと出してやりたいと互助組合に預けていたお金は、横領されてしまう。女優を目指して家出したジョンの愛娘クレアラは、同僚グレイス・ラッドによつて顔に硫酸をかけられ、またグレイス自身は鉄道自殺をとげる。ボブは贋金作りに手を染めて、ついには警察に捕らえられて死んでしまう。クレムは財産目当てに母親を毒殺しようとするが失敗する。このように見ていくと、ギッシングによつて貧しき人々の生活が描写されるとき、犯罪と暴力は欠くべからざる要素となつていくことがわかる。

ギッシングの描く犯罪者が、犯罪性の刻印をその容姿に明瞭にとどめている点は、当時の犯罪学の影響と見ることができ。『暁の労働者たち』の中で、幼い日の主人公アーサー・ゴールディングを連れてスラム街を訪れたトラディ氏は、次のように言う。

「ここにしばらく立つて……あそこを通り過ぎる人々の顔をよく見てみよう。悪徳と犯罪が、まるで言葉で書かれているかのようにはっきりと現れていない顔なんてあるだろうか？ 顔ばかりを見ていないで、身体つきも見てごらん。あの一メートルもないぐらいの背丈の老婆を見なさい。何という恐ろしい奇形だろう！ 労苦で疲れ果て、悪徳に蝕まれ、空腹にさいなまれた惨めな子どもが、幾世代かかってあんな子孫を生み出したのだろうか？ 顔には気がついたかね？……あの男の鼻と唇の

獣のような形や、恐ろしく突き出た顎骨を見てみなさい。あの十五歳ぐらいの少女はどうだろう？ これ以上完璧におぞましい顔つきを想像することができようだろうか？」

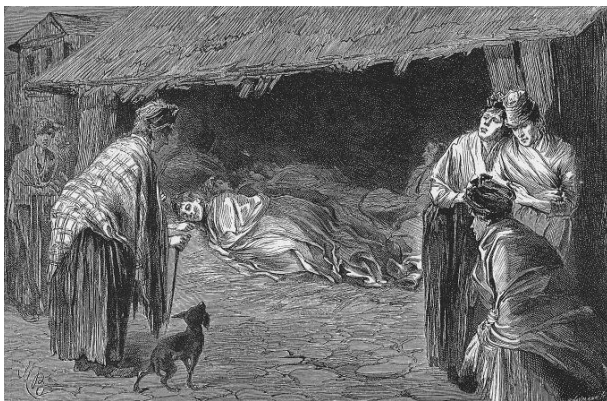
（第一部第十一章）

トラディ氏は「見る (look at)」という言葉を幾度も繰り返す。「悪徳と犯罪」の刻印は、「まるで言葉で書かれているかのようにはっきりと」目に見える印としてスラム街の人々の身体に刻まれている。男の「恐ろしく突き出た顎骨」は、まさしくロンブローゾの「生まれながらの犯罪人」の特徴であり、老婆の小さな身体は退化的な形質を示す指標である。ロンブローゾが主張したように、ここでは内面の逸脱が、観察者がひとつひとつ確認し記録できるような外面の逸脱となって現れているのである。

犯罪者はまた、多くの場合動物や異人種といった比喻を使って表され、退化した野蛮人として表象されている点も、犯罪学をめぐる言説と重なり合う。『暁の労働者たち』において、死の床で革命の幻想に取り憑かれて、アーサーを襲撃するジョン・ペザーの手は「ゴリラのように黒く毛むくじやら」（第二部第七章）である。『無階級の人々』（二八八四年）で、オズモンド・ウェイマークを監禁して金を奪うスラム街の住人スライミーは、「血走った目」を持つ「野生の獣」（第十二章）のようだと描かれる。『ネザー・ワールド』のクレムは、最も鮮明に

犯罪者の退化的形質を体现している。ジェインを虐待する彼女の残忍さは、「森の中を走り回る高貴な野蛮人」にも等しく、「レッド・インディアンのような嗅覚」（第一章）でジェインが一番恐れていることが何であるかを感知する。彼女の狡猾さと残忍さは、別の場面では「藪で待ち伏せをする野蛮人」（第十四章）のそれとも比較される。彼女は文明の対極にある野蛮人なのだ。「文明はこの若い女性を告発することはできない。文明と彼女は何の共通の尺度も持たないからだ」（第一章）と語り手は記している。

ロンブローゾは遺伝性の退化的欠損のため矯正不可能な「生まれながらの犯罪者」が存在すると考えたが、ギッシングは犯罪が遺伝による退化的形質に起因するののか、それとも環境に起因するののか、どちらか決めかねているようにも思われる。彼は確かに人々を犯罪へと駆り立てる貧困者層の劣悪な生活環境（図②）を、初期の小説の中で告発している。『シカゴ・トリビューン』に一八七七年四月に掲載された最も初期の短篇小説のひとつ、「高すぎた代価」では、貧しい靴職人の主人公が、病弱な孫娘を田舎で療養させたいというささやかな願いのため、誘惑に屈して盗みを働く。正直者の彼が盗みという罪を犯したのは、ひとえに孫娘を思う「彼の心の本質的な善良さ」（第二章）のためで、彼は生涯をかけて罪の償いをする。『無階級の人々』のアイダ・スターや彼女の母ロティが売春で生計を立てざるをえなかったのは、女性が自活していく手段が限られてい



図② 「ホワイトチャペルの荒屋で眠る浮浪者」(『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』1888年10月13日号)

たからであり、彼女たちの性質そのものが墮落していたからではない。『ネザー・ワールド』のマーガレット・ヒューイットの窃盗は、貧困がまねいた犯罪としてきわめて同情的に描かれている。事件は過去の新聞記事という形で物語に挿入されているが、それによると、彼女は「正直で働き者」であったにもかかわらず、朝の九時から夜の八時まで週給四シリングという長

時間、低賃金労働に耐えかね、ついに「誘惑に屈して」五ポンド相当の上着を雇い主から盗んだという。彼女は三日間何も食べておらず、以前の下宿には「隅に置かれた数枚のボロ着と小さなテーブル以外には家具はなかった」。その窮状には彼女を裁いた判事さえもが、「困窮が不正行為を正当化することがあつてはならない」としながらも、「悲しい状態だ」(第六章)と言つて同情したぐらいであつた。

しかし、ギッシングは、貧困という環境が犯罪者を生み出す要因だとする一方で、中流階級と労働者階級の人々の異なる生活環境に起因する知的、道徳的優劣の差は、遺伝するものだということも示唆している。クレムの狡猾さと残忍さは明らかに母親譲りのものであり、彼女の家系に関して語り手は、「彼女の血に飢えた支配欲は、ペコヴァ家の先祖たちが苦しんだ残忍な奴隷状態の自然な成り行きではなからうか？」(第一章)と述べて、先祖代々耐え忍んだ劣悪な生活環境が残忍な性格を育み、遺伝的性質となつたのではないかと疑問を投げかける。労働者階級の人々の貧困が残忍、狡猾といった犯罪者気質を育むとするなら、中流階級の人々の豊かな生活環境は繊細で洗練された感受性や人間性を育む。『民衆』に登場するリチャードとアデラ・ミューティマー夫妻は、労働者階級と中流階級の遺伝的性質の違いに阻まれて、お互いを理解することができない。「おそらく彼女の祖先は三世代にわたつて良家の身分を誇つてきた。それは彼女とミューティマー家の人々とのあいだに大き

な溝を生むのに十分であつた」(第二十七章)と語り手は述べる。暴力に満ちた世界に生きる労働者階級の人々と、十分な教育を受け、文化を享受できる中流階級の人々の性質の差異は、遺伝として固定化され、乗り越えることのできない壁として彼らのあいだに横たわるのである。

第三節 階級を越える犯罪

このようにギッシングの初期の小説における犯罪の表象を検討してみると、逸脱は労働者階級に限定され、中流階級は正常の枠内にとどめられて、結果として現存する社会体制を維持しようとする保守的な傾向がうかがえる。しかし、犯罪が階級の壁を越えて中流階級の世界に侵入し、脅威を与えることもある。そもそも貧困に陥る可能性は、労働者階級だけではなく中流階級の人々にも当然あるわけで、それゆえ誰もが犯罪者になる可能性から逃れ得ない。貧しい売春婦ネルとの恋に落ち、困窮の挙句に窃盗をはたらいて懲役、オーエンズ・カレッジ追放という不名誉な懲罰を受けたギッシングであればこそ、このことを誰よりも強く認識していたはずである。『暁の労働者たち』のアーサーの父は、オックスフォードのペイリオル・カレッジを出たが、その後事務員として生活に必要なだけの給料を稼ぐことができず、誘惑に屈して雇用主から盗みを働く。このことがきっかけで彼は更なる貧困に追いやられ、ついにはスラム街の

極貧生活の中で死を迎える。売れないがゆえに貧困生活を強いられる作家たちの物語、『三文文士』(一八九一年)では、貧困がいかに人間を墮落させるものであるかが、様々な登場人物を通して如実に描かれている⁽¹⁵⁾。唯一の成功者であるミルヴェインは物語の最後に、ウォルター・サヴェッジ・ランドーの詩を引用して、「悪徳は窮乏に通じると、くどいくらい繰り返言われてきたが、窮乏が悪徳に通じるとは誰も言わないだろうか?」(第三十七章)と語る。貧困に陥った人々は、正常と逸脱の危うい境界線をさまようことを運命付けられるのである。とはいへ、中流階級から転落し罪を犯して正常から逸脱した人々が、貧困者層の犯罪者と同等のものとして描かれているのかといえ、決してそうではない。アーサーの父が犯した犯罪は、一時の誘惑に負けたためであり、その罪が犯罪者形質としてその子供に遺伝することはない。アーサーは社会の最底辺層の人々と一緒に暮らしているときでさえ、本来の生まれの良さをその容姿と性質にとどめている。彼の持つ細やかな感情は、「彼を普通の浮浪児と区別する洗練された性格的要素」(第一部第六章)であり、「乱暴さや粗野な身勝手さが見られないことにおいて、彼は同じ境遇にあるほかの少年たちとはある程度違っている」(第一部第七章)のである。

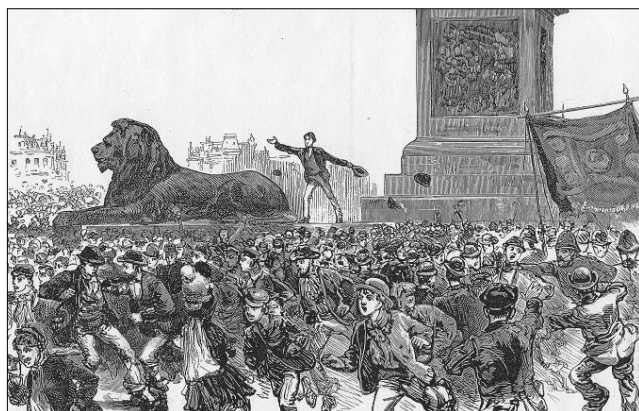
中流階級の人々が〈正常〉を逸脱して犯罪者となる可能性とともに、ギッシングが強調するのは、労働者階級の暴力が階級の壁を越境して中流階級の人々の世界を脅かす可能性である。

そしてそれは、労働者階級による復讐という形によって現れる。積年の貧困や抑圧に耐えていた労働者階級の怒りが暴力となつて爆発するとき、その破壊的な力は階級の壁を越えて、既存の社会体制を揺るがそうとする。『暁の労働者たち』のペザーは、労働者階級のルサンチマンを体現する人物である。監獄で生まれ救貧院で育ち、ありとあらゆる貧困の辛酸をなめてきた彼は、「ロンドンの通りが血の川となるような」（第二部第七章）革命の大量虐殺を夢見ている。『無階級の人々』のスライミーによるウエイマーク襲撃も、個人的な恨みにもとづくものではなく、労働者階級の復讐と解釈できる。スライミーという名前は「汚泥（slime）」を連想させるが、エルム・コートの劣悪な衛生状態は、天然痘という病を撒き散らして家主のウッドストックを死に追いやることで、ある種の復讐を成し遂げる。デイヴィッド・テオ・ゴールドベルグは「不潔、泥、病、汚染は分類的範疇を逸脱する働きを持つものとして表現される。つまり、法の観点から言えば秩序破壊の危険性として表される」と述べている。十九世紀の衛生問題に関する様々な報告書や新聞、雑誌記事、小説において、スラム街の不衛生に起因する疫病の蔓延の脅威と労働者階級による犯罪や反乱の脅威とは、常に表裏一体のものとして論じられた。例えばディケンズは『荒涼館』（一八五二―五三年）において、トム・オール・アローンズと呼ばれるスラム街の貧困と不衛生な状態を告発する際、疫病の発生に貧困者層の反乱のイメージを重ね合わせている。「トムの汚

泥のかけら、彼が呼吸する毒された空気の一立方インチ、周囲の汚れ、無知、邪悪、彼の犯す非道の一つ一つが、必ずや社会のすべての階層を通り抜け、栄華を誇る者たちの頂点にまで達して復讐を遂げるであろう。汚染、略奪、腐敗によって、トムは確実に復讐を遂げるのだ」（第四十六章）と語り手は述べる。疫病は社会の底辺に生きる者たちのルサンチマンの表出であり、階級の境界線を崩して社会全体を揺り動かす脅威となる。『無階級の人々』におけるエルム・コートの疫病の蔓延というモチーフには、『荒涼館』の影響が感じられる。スライミーに代表される貧困者の怒りは、暴力と疫病の両方の形をとって、中流階級への復讐を果たすのだ。

労働者階級による怒りの爆発の恐怖が最も端的に表現されているのは、貯金を横領され怒り狂った群集が指導者のミューテイマーを殺害する『民衆』の最後の場面である。ロンブローゾは犯罪者と共通する群集の退化的形質について触れ、「群集の大多数は善人であっても、群集そのものは残虐な獣に変質する。各々の個人が持つ激情は多数の人間と同時に共有された場合、二倍の強さとなる。各々の感情が次から次へと伝播し、すべての個人が持つ潜在的な犯罪性が突然現れるからだ」と論じている（図③）。ここでロンブローゾは、群集は「善人」であるとしながらも、同時に「潜在的な犯罪性」を持つとも述べて、群集と犯罪者を同一視している。『民衆』における群集も、野蛮人や獣のイメージを使って描写され、犯罪者との共通性が強

調される。「民衆はただ虚ろに響く演説にうんざりして蜂起した。それは野生の獣の大きな雄叫びのときであり、殺戮を味わうときであった。群集の顔のほとんどすべては、人間の表情が作り出しうる最大限の野蛮性を表すべく歪められていた」(第三十六章)。群集の潜在的な野蛮性が露になり、社会を脅かす



図③ トラファルガー・スクウェアの集会の分裂 (『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』1886年2月13日号)

暴力となる瞬間である。「民衆」の中で群集の暴力の犠牲者となるのは、中流階級ではなく労働者階級出身のミューティマーであり、その意味で暴力の脅威は限定的なものではあるが、労働者階級のルサンチマンの爆発が社会の安定に及ぼす危険性は十分に描かれていると言えよう。

犯罪と暴力は階級の壁を越境して、中流階級の安定的な世界を揺るがす。しかし、ギッシングは中流階級の人々自身の内に潜む暴力性も見逃してはいない。『暁の労働者たち』でモード・グレシャムと結婚するジョン・ワグホーンは、一見非の打ち所のない立派な紳士だが、実際にはギャンブルや飲酒、売春婦との遊蕩にふける墮落しきった生活に明け暮れている。一方のモードは夫を軽蔑し、自らの空虚な人生のわびしさを、際限のない消費で紛らわせている。そんな二人が決裂するとき、ワグホーンは怒りの感情を制御できずにモードに暴力をふるい、防御のためにピストルを取った彼女に「虎のように」(第十三章)飛びかかって、武器を奪う。正常と逸脱は階級の壁によって境界線を引くことはできない。ワグホーン夫妻の描写は、困窮だけではなく過剰な消費によっても人間は墮落すること、また貧困とは程遠い、贅沢な品々に囲まれた生活の中にも暴力は存在することを示している。中流階級の人々を描いた中期の小説のひとつ『渦』(一八九七年)でギッシングが問題とするのは、そのような暴力であり犯罪である。

第四節 国境を越える犯罪

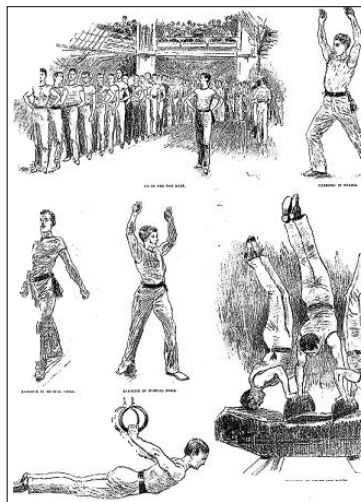
『渦』には、女中によるカーナビー邸の泥棒、「ブリタニア融資投資銀行株式会社」の破産、ヒュー・カーナビーによるサィラス・レッドグレイヴ殺しという三つの犯罪が描かれているが、これらの犯罪は、豊かな消費文化を謳歌する中流階級の人々の内に潜む腐敗や暴力性を暗示し、逸脱が労働者階級に限定されたものではないことを示唆している。ブリタニアの破産が発覚する前に、フロシנגラム家の娘アルマが催した演奏会を聴きに行ったハーヴェイ・ロルフは、「ベネット・フロシングラムのような男は、いろんな形の〈狂気〉を知っているに違いない。彼自身、真正正銘の異常につながるような愚行の数々を行ってきたはずだ」と考え、「この陽気で音楽的な暮らしに、どんな恐ろしい残酷性や虚偽が隠されているのだろう」（第一部第四章）と感じる。裕福な階級の華やかな世界に生きる人間の内面に存在する犯罪性を、ロルフは鋭く感知しているのだ。カーナビーも、自分の邸宅の泥棒を手引きした女中について次のように語って、ロルフと同じような認識を示している。

「彼女はホワイトチャペルの泥棒なんかじゃない。我々が一緒に住んでいるような人たちの中に組織されたギャングがいるんだ。もし僕が食事に招かれたとしたら、泥棒や詐欺師や、そ

ういった類の連中の隣に座っていることだってありえないことじゃない。……何人もの男や女たちがベルグレイヴィアやメイフェアからニューゲート監獄へ連行されていくんだよ。きつとそうなる！ 我々の文明のようなものから、いたいそれ以外の何が期待できるっていうんだ？」（第二部第七章）

ベルグレイヴィアとメイフェアはロンドンの一等地で、裕福な人々が住む地区である。カーナビーはのちにレッドグレイヴ殺しによって、皮肉にも「何人もの男や女たちがベルグレイヴィアやメイフェアからニューゲート監獄へ連行されていく」という言葉を自分自身で証明し、成就することになってしまう。初期の小説において労働者階級の人々の属性であった犯罪性は、今や中流階級の人々の属性となり、イギリス社会全体を蝕んでいるのだ。

三つの犯罪の中で特に注目したいのは、カーナビーの犯した殺人である。レッドグレイヴと自分の妻シビルとの不倫を疑うカーナビーは、レッドグレイヴの家に偶然居合わせたアルマを妻と見誤り、激情にかられて彼を打ち殺す。事件後、彼は妻シビルに「これはすべて僕の忌々しい欠点のせいだ。僕は文明人の中にいるべきじゃない獰猛で屈強な獣なんだ」（第二部第十三章）と語って、自己の内面に文明とは相容れない、獣のような攻撃性や野蛮性が存在しているという不安を表現している。だが、殺人という罪を犯すに至らしたカーナビーの攻撃性、野



図④ キリスト教実業学校の体操の授業風景（『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』1888年11月17日号）

蛮性は、カーナビーが認識するように文明と相容れないのではなく、実は文明と表裏一体なのではないか、いや文明そのものなのではないか？——そうギッシングは『渦』において問いかける。カーナビーの殺人はイギリスの文明に潜む暴力性を暗示する出来事として解釈することができるのである。

小説の語り手は、カーナビーの身体を「よい食事でよく育ったイギリス人男性の見事な見本だった——背が高く、日に焼けて、柔軟で、かなり魅力的で、赤い首と力強い顎、そして鋭い目を持っていた」（第一部第二章）と描写する。このたくましく鍛え抜かれた彼の身体は、〈筋肉質のキリスト教〉の理想を体現している（図④）。〈筋肉質のキリスト教〉という用語は、キングズリーの『二年前』（二八五七年）に対する書評の中で、「神を恐れ、千時間で千マイル歩くことのできる男性」¹⁹という

理想を表す言葉として最初に使われた。その後帝国主義の高まりとともに、世界を支配できる肉体的な強靱さとキリスト教的精神を兼ね備えた男性像は、時には揶揄の対象となりながらも、強く人々の心をとらえていった。『渦』が出版された一八九七年は、〈新帝国主義〉と呼ばれる時代の只中であつた。ヨーロッパ諸国にアメリカ合衆国、日本を加えた列強が熾烈な植民地獲得競争を繰り広げていたこの時代、イギリスの外交政策もますます好戦的な拡張主義に向かつていった。『渦』の語り手は、カーナビーに「あと少しの落ち着きと冷静さ、そしてほんの少しの知的な額があれば、最上の征服し、文明化するイギリス人となりえたであろう」（第一部第二章）と述べて、彼の強靱な身体が帝国の発展に寄与する可能性を秘めたものであることを示唆する。彼は実際、結婚以前にボスワース大佐のコーカサス探検隊に参加したり、スペインに狩猟に出かけたりして、〈征服し、文明化するイギリス人〉としての素質を発揮している。彼の家系がおそらく遺伝的に強靱な身体に恵まれているであろうことは、彼の兄と妹に関する記述からうかがえる。兄マイルズは南アフリカの北西フロンティアで活躍する少佐、妹のルスは伝道宣教師の妻で、兄妹はそれぞれ力と文化による植民地の支配に貢献しているのである。このようにして、ヒューを殺人へと駆り立てた攻撃性は、実は帝国の拡大に必要な不可欠な攻撃性でもあることが明らかにされる。

しかしながら、カーナビーの攻撃性は、結婚後シビルの消費

文化の世界に取り込まれることによって、捌け口を失い、フラストレーションを募らせていく。⁽²⁾ 彼は狩猟に行くことを止め、シビルが好む都会での生活に専念するが、そのような生活は決して、彼の冒険や危険を求める内なる欲求を満たしてくれるものではなかった。「彼の好みではない、娯楽に満たされた怠惰、贅沢、浪費の一年にわたる結婚生活は、男性的な落ち着きのなさという当然の結果をもたらした。彼の頑強な、とりわけ戦闘的な、身体と気性は、荒々しく暴力的な生活のもとの自由を求めていた」(第一部第六章)と語り手は分析している。次に引用するロルフとの会話が明らかにするように、カーナビーは植民地拡大という幻想に浸ることで、鬱屈した攻撃性を発散させようとする。

「我々すべての何かがひどく間違っているんだよ——それだけ確かだ」
「ひとつには怠惰だろうね」とロルフは言った。

「どうだろうね。僕は何をするにも歳をとりすぎた。どうしても僕はマイルズについて軍隊に入らなかつたんだろう？ 南アフリカに行って、自分でちよつとした戦争を起こしたくなることだってあるんだ」

ロルフは声をあげて大笑いした。

「そんな悪い考えじゃないね。それに間違ひなくこの世で一番簡単なことだ」

「黒人狩りさ。すばらしく大きなゲームだね」

「南アフリカでは他にもやることはあるさ」とハーヴェイは言った。「……我々は戦つて、併合し続けるんだ——大英帝国の衰亡までね。……我々の中には過度に文明化されてしまったものもあるから、残りのものがその反動で健全な野蛮に走つてしまふんだ。我々は二十世紀に炎のように戦うだろう。それだけがいギリス人を健全に保つ唯一の方法だ。商業主義は呪縛だ。……いギリス人は戦つて余分な脂肪を落とさなくちゃいけない。戦争はいギリスの節制食療法さ」 (第一部第二章)

カーナビーのフラストレーションはロルフにも共有されている。十九世紀イギリスにおいて植民地は急激に増大する人口を吸収する広大な空白の土地であり、労働者階級の不満をそらす「政治という機械の安全弁」⁽³⁾であつた。けれども、ここで「安全弁」として機能しているのは、貧困にあえぐ労働者階級の不満に対してではなく、過度な文明の中で倦怠感に悩む中流階級の男性たちの不満に対してである。行き場を失つた男性たちの攻撃性は、国境を越え帝国の前線へと向つていくのである。

ロルフは上の会話で、商業主義は男性の攻撃性を阻害し、帝国での戦いこそがいギリス人男性を健全に保つと述べている。しかし、商業主義と帝国主義は実際には表裏一体のものだ。クイーンズランドで精錬業を営むダンダーの例が示すように、イギリスの商品は植民地で生産される原材料によって作られる。

また、植民地は様々な文物をイギリスに提供し、人々の消費への欲求をかきたてる。消費文化を謳歌するシビルは、ハワイ、オーストラリアに滞在後、本国に戻ってきたとき、「博物館ができるぐらいの美しく珍しいもの」(第二部第四章)を持ち帰っている。こうした商品の消費と陳列は、物語の冒頭のカーナビ―邸が、ヒューによって仕留められた動物の剥製で飾られていたことと重なり合い、消費文化の背後にある暴力を暗示する。帝国によってもたらされた富が過剰な消費文化を生み出し、その中で行き場を失った男性たちの攻撃性は帝国の前線に捌け口を見出そうとする——『渦』で描かれているのはそのような暴力の連鎖なのだ。

カーナビ―は自身を文明人の中の獣と呼んだが、文明が野蠻な暴力にもとづいている以上、誰もが犯罪者だと言うこともできる。カーナビ―を逸脱者という範疇に回収してしまうことはできない。なぜなら、逸脱と正常の境界線などどこにもないからである。人間の歴史は文明の歴史である一方で、野蠻と犯罪の歴史でもある。ギッシングが『渦』の中で達したこの悲劇的な結論は、ロルフの内面を借りて語られる。

それに大好きだったあの歴史——それは声なき悲嘆の忌まわしい記録以外のいったい何だというのだ？ どうして彼は何世紀にもわたって果てしなく繰り返される苦しみを——戦争、疫病、圧制、火刑柱、牢獄、拷問の無数の道具、想像を絶する残虐行

為を——じつと注視することに喜びを感じたのだろうか？

(第三部第一章)

「文明の記録であると同時に野蠻の記録ではないものなど何もない」とベンヤミンは述べている。ロルフの歴史の再認識はベンヤミンの言う「野蠻の記録」の認識でもある。過去の歴史が野蠻の歴史であるとすれば、未来はいつたくなるのであろうか？ 『渦』においてギッシングは、この問いに対しても決して楽観的な見解を示してはいない。未来をつかさどるのは子供であり、大人は教育を通じて子供へ未来の希望を託す。しかし、ロルフは「人類の最大の関心事が殺戮の道具を完成させることであるような時代」(第三部第六章)に確固たる希望を持つことはできず、いったい何を息子ヒューイに教えればよいのか思い悩む。暴力的な世の中に適応することを教えるべきなのか、それとも優しさや同情といった豊かな感情を育むべきなのか？——彼には答えを見出すことができない。

『渦』はロルフと彼の旧友バジル・モートンが、キプリングの好戦的な詩『兵舎のバラッド』(一八九二年)を読んで、詩に表された帝国主義的世界観に共感を示す場面で終る。この場面についてギッシングは、「あのモートンとの会話で、私は決してロルフが『兵舎のバラッド』の人生観に傾いていることを示唆しようとしたわけではない。彼の言ったことすべては、ただ唾棄するような事実に対する、彼の希望のない認識を表現しただ

けだ⁽²³⁾」と述べている。『渦』は、暴力が国境を越えて果てしなく拡散していく時代に対して、ギッシングが投げかけた疑問とためらいの声で終るのである。

* * * * *

以上、本稿では世紀末に流布した犯罪学のコンテクストの中で、ギッシングの作品を読み解いてきた。初期の小説において、貧困にあえぐ労働者階級の世界の犯罪や暴力を描いたギッシングだが、その関心が中流階級へと移るにつれ、より大きな視点に立ち、いわば国家規模の暴力にまで問題意識を広げて作品を書いた。『渦』の三年前に出版された『女王即位五十年祭の年』(一八九四年)には、様々な商品の広告が溢れるロンドンの街路に、ヴィクトリア女王即位五十年記念を祝って繰り出した群衆が描かれている(図⑤)。彼らは、『民衆』に登場する怒りに満ちた群衆とは違い、「間の抜けた満足に浸つてのどをごろごろと鳴らす途方もなく大きな獣」(第一部第六章)のような群集である。しかし、消費文化を謳歌して満足に浸る群衆の間にこそ、国境を越える強大な暴力のエネルギーが蓄積されていることを、ギッシングはすでに感じ取っていたのかもしれない。彼の発した文明に対する疑問の声は、二十一世紀を生きる私たちにも向けられている。



図⑤ ヴィクトリア女王即位50周年記念祭での行列(1887年)

註

- (1) Michel Foucault, *Discipline and Punish*, trans. Alan Sheridan (Hammondsworth: Penguin, 1979) 183.
- (2) William Greenslade, *Degeneration, Culture and the Novel, 1880-1940* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 91.
- (3) Cesare Lombroso, "Criminal Anthropology: Its Origin and Application," *The Forum* 20 (1895): 35.
- (4) Cesare Lombroso, "Criminal Anthropology Applied to Pedagogy," *The Monitor* 6 (1895): 51-59.

- (15) Greenslade 90; Jenny Bourne Taylor and Sally Shuttleworth, ed., *Embodied Selves: An Anthology of Psychological Texts, 1830-1890* (Oxford: Clarendon, 1998) 262-64.
- (16) Marie-Christine Leps, *Apprehending the Criminal: The Production of Deviance in Nineteenth-Century Discourse* (Durham: Duke UP, 1992) 29.
- (17) Greenslade 24.
- (18) Greenslade 50-51.
- (19) Harold Thomas, "Poverty and Crime," *The Westminster Review* 145 (1896): 76.
- (20) Thomas 76.
- (21) W. D. Morrison, "The Study of Crime," *Mind: A Quarterly Review of Psychology and Philosophy* 1 (1892): 507.
- (22) Leps 43.
- (23) Cesare Lombroso, "Illustrative Studies in Criminal Anthropology," *The Monist* 1 (1891): 339.
- (24) Morrison 504.
- (25) 『三文文士』における貧困と人間性の墮落に関しては、松岡光治『『三文文士』——貧乏作家はうだうだが上がらない』『ギンヘン』の世界』（英宝社、二〇〇三年）二六—二八頁参照。
- (26) David Theo Goldberg, *Racist Culture: Philosophy and the Politics of Meaning* (Oxford: Blackwell, 1993) 54.
- (27) Lombroso, "Criminal Anthropology: Its Origin and Application," 43.
- (28) 今のうち銀行の破産に関しては、詐欺、横領といった明確な犯罪行為があったかどうかは曖昧にされているが、自殺をした社長ベネット・フロシנגガムの共同経営者のウィケラムが投獄されたということが仄めかされている（第二部第四章）ことから、何らかの違反行為があったと考えられる。少なくとも破産の結果多大の被害をこうむった人々にとって、フロシングガムは「泥棒」以外の何ものでもない。カーナビはフロシングガムを「泥棒」と呼び、銀行の破産と彼の屋敷で窃盗を働いた女中を同列おいて、「これはうちの女中がやったのと同じくらい完全なかたまりだ」（第一部第五章）と言っている。
- (29) Donald E. Hall, "Muscular Christianity: Reading and Writing the Male Social Body" in *Muscular Christianity: Embodying the Victorian Age*, ed. Donald E. Hall (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 7.
- (30) カーナビの男性性がいかにモデルに象徴される女性的消費文化によって阻害されているかの議論に関しては、Simon J. James, "The Discontents of Everyday Life: Civilization and the Pathology of Masculinity in *The Whirlpool*" in *George Gissing: Voices of the Unclasssed*, ed. Martin Ryle and Jenny Bourne Taylor (Aldershot: Ashgate, 2005) 93-105 参照。
- (31) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell UP, 1988) 115.
- (32) Walter Benjamin, "Theses on the Philosophy of History" in *Illumination*, ed. Hannah Arendt, trans. Harry Zohn (London: Fontana, 1973) 248.
- (33) Patrick Parrinder, ed., *The Whirlpool*, by George Gissing (Hassocks: Harvester, 1977) 464 n.